

2024.7
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみやま 富薬

7号

第46巻
No.420



トウモロコシ *Zea mays* L. (イネ科 *Gramineae*)

生薬 ナンバンモウ（南蛮毛）種子の収穫時に雌花の糸状の花柱を取り、陽乾する。

成分 KNO_3 、ステロール類：sitosterol、stigmasterol、フラボノイド配糖体：isoquercetin、有機酸：malic acid, citric acid, tartaric acid、糖類等。

効能 民間薬。利尿、利胆薬として、腎臓病、水腫、脚気、肝炎、腎結石、糖尿病に用いる。

生薬 ナンバンモウ（南蛮毛）

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



アメリカ大陸原産の植物で、旧大陸の植物とは違った特徴を持っています。成長が早く播種から3-4ヶ月で草丈1-3mになる大型の一年草です。茎が伸びると地ぎわから上の2-3節から多数の太い支持根が冠状に出て地面に入り、茎が倒れるのを防ぎます。茎は内部が髓で満たされ、円柱形で直立、10以上の節があり、各節から1葉ずつ生じて互生します。葉は狭長披針形で長さ50-60cm、漸尖頭で先端は反曲し、洋紙質で下部は鞘状に抱茎します。雌雄同株で雄性花は茎の頂に総状花序を形成し、茎の中位の葉腋に雌花序を2-4個付けますが、その内1個だけが熟する場合が多く、上位の1個を残して摘果されます。摘果した未熟果はベビーコーンまたはヤングコーンと言い食用にします。太く短い穂柄の先に紡錘状

の太い芯に雌花が規則正しく配列していて、多数の葉鞘が変化した膜質の苞片にいく重にも包まれています。子房からは赤褐色で毛管状の花柱が、長い物で50cmを越し、長い髪の毛のように見えていて、それが苞頭から垂れ下がります。この長い花柱の先端部半分には柱頭で微毛が生えていて花粉が付きやすくなっています。時期がくると茎の先の雄花から、花粉が雨のようにこぼれて雌花の毛について受粉する風媒花です。

人類は今から数万年前に陸続きであった新大陸に移動、南下し、BC6700年頃には中米のメキシコやボリビアでトウモロコシの原種に遭遇したものと考えられています。原種の一つと考えられるメキシコ原産のテオシント (*Euchlaena mexicana*) は現在のトウモロコシの主茎が枝分かれしないのに対し、2次枝、3次枝と枝分かれします。栽培化が進んだBC5000年頃から人の手による選別が行われ、側枝が確実に実る雌花序に変化したものと考えられています。退化した葉は幾重にも果実を包み込め、鼠や鳥から実を守る役目をする代わりに、しっかり包み込まれた種子は広く散布されることなく、栽培する人の手による繁殖しか無くなりました。これら、人による選別が現在の多くの品種の基になっています。

コロンブスが新大陸を発見し、種子をスペインに持ち帰ったのは1493年のことでした。その後、またたく間にヨーロッパ諸国に広まり、フランス、イタリア、トルコ、西北アフリカへと伝わりました。中国には陸路西域から伝わったようで、16世紀半ばには伝わっていたと考えられています。『本草綱目』(1578)に「玉蜀黍」の名で「種類は西土から出たもので、種植するものはやはり罕だ。その苗、葉は俱に蜀黍(モロコシ *Sorghum bicolor*) に似ているが肥えて矮く、また薏苡(ハトムギ *Coix lacryma-jobi* var. *ma-yuen*) の苗にも似たもので、高さ三、四尺のものだ」また、「米 中を調え、胃を開く」、「根葉 小便淋瀝、沙石痛の忍び難きには、煎湯を頻に飲む」と種子や根葉の薬効も示していますが「南蛮毛」についての説明はありません。

日本にトウモロコシを伝えたのはポルトガル人で、天正7年(1579年)に長崎に伝えたとされています。中国から伝わったと勘違いされたのか「トウモロコシキビ」という名前が付けられましたが、後に「キビ」がとれ「トウモロコシ」になったと言われています。唐(昔の王朝、単に外国を表す言葉としても用いられる)からもたらされたモロコシ(唐土)の黍という意味でしょう。江戸時代初期の『多識編』(1612)には「玉蜀黍 今、案ずるに多末岐比」とあり、玉黍を音訳したともとれます。『本朝食鑑』(1692)には「南蛮黍 これ即ち玉蜀黍なり。今、俗に南蛮黍、唐毛呂古志と称す。蜀黍、唐岐美と称す」と色々の名でよばれていました。また「柘榴核の如く、黄白色で光滑。炙炮して食べるもよし、晒し乾し、粉にし餅を作る」とあり、薬効については『本草綱目』を引用しています。『農業全書』(1697)には「蜀黍」の項に「又一種玉蜀黍と云うあり、種ゆる法前(モロコシ)に同じ。其粒玉のごとし。菓子にすべし。……是又肥地を好む。瘦地には実らず」と栽培についても記されています。(村上守一 記)